インターネットの宗教的活用の現状と可能性について
——アメリカのキリスト教会の調査から——

川　島　堅　二

はじめに，課題と方法

パーソナルコンピュータの性能の向上や普及と共に，そのネットワークであるパソコン通信やインターネットが新たなメディアとして注目を集めている。特にインターネットは，資力のない個人が世界に向けて情報発信可能なその性格が「インターネット市民革命」といった言葉で喧伝されたりしている。しかしながら他方，我が国における一部自治体や教育機関では，国から補助金が出るのでコンピュータを購入しネットワークを組んでみたものの，その具体的使途は後から考えるといった本末転倒の事態も生じている。タイプライターによる文書作成の下地がある欧米と，そのような歴史の浅い日本との文化的な相違も考えられる。このような状況下にあって，先ず求められるのは，現在一般の人々がインターネットをどのように使っているのか，またこの比較的新しいメディアにどのような可能性を感じているのかを知ることであろう。本論文の目的は，インターネットの先進国といわれるアメリカにおいて，特にキリスト教会がこれを実際どのように利用しているかの調査結果をもとに，インターネットの利用法の現状と，その可能性を探ることである。

調査対象をキリスト教会にしたのは，筆者の専攻がキリスト教学であるという理由の他に，キリスト教という宗教が，16世紀の宗教改革におけるグーテンベルクの印刷術との関わりに端的に見られるように，メディアの発達と深い関わりを持っていることによる。キリストの「行って，すべての民を私の弟子としなさい」（マタイ28：19）という言葉に象徴されるように，世界宣教

はキリスト教の活動の重要部分であり，インターネットのような新しいメディアに深い関心を寄せていることが予想されるからである。ただしその場合にも，調査対象を大学の神学部や研究所ではなく，地方教会（local church）に限ることによって，いわゆる一般市民のインターネット利用方法とこのメディアに対する意識を明らかにするように務めた。

調査方法は，アメリカのルター派，長老派，聖公会に属する教会の内，インターネット上にホームページを開設している648教会[ii]に対する電子メールによるアンケートである。アメリカのキリスト教会の教派としては，これら3教派の他にバプテスト派やメソジスト派が有力である。当初はそれらも調査する予定であったが，予想外に対象が多く，時間の都合から今回は見合わさざるを得なかった。

電子メールによる調査は初めての経験ゆえ，この種の調査にどの程度使えるのか予想がつかなかった。また，インターネットの発達したアメリカでは，近年いわゆるジャンクメールが横行し長文のものは読んでもらえないとも聞いていたので，設問は必要最小限にとどめ，次の3つとした。[iii]

(1) インターネットはあなたにとって，特にあなたの教会の宣教に役立ちますか。

(2) もし役立っているなら，その利用法を具体的に教えて下さい。

(3) サイバースペースにはどんな神学的可能性がありますか。

最後の設問は，筆者としてはインターネット上の教会，いわゆるvirtual churchの可能性を念頭に置いていたが，あえてそのような限定はしないで，自由に書いてもらう形をとった。インターネットの可能性一般についての意識を知るためである。

第1章　調査結果

送信総数は，732通である。調査対象教会の総数より多くなっているのは，1教会に複数の教職がいたり，場合によっては役員や長老のアドレスを載せているもの，また多くの場合ホームページの制作者（webmaster）のアドレスが付記されており，可能な限りそれらすべてに質問紙を送付したからである。

返信総数は，282通で，38.5%の回収率であった。そのうち有効な内容を持つものが256通，その回答者の内訳は，教職者90，信徒92，不明74であった。

第１の問い「インターネットは宣教に役立つか」に対しては，６つに回答が分かれた。使用実績があり「役立つ」にvery等の副詞をつけてきたものをA。同じく使用実績があり「役立つ」と答えてきたものをB。使用期間が短期間で，まだ十分な実績はないが役立ちそうと答えてきたものをC＋。使用期間が短期間で，実績もなく評価不可と答えてきたものをC。同じく実績がなく，しかも役立ちそうもないといってきたものC－。役立たない，使ったことがないと答えたものをFとすると，結果は以下のようになる（表１）。

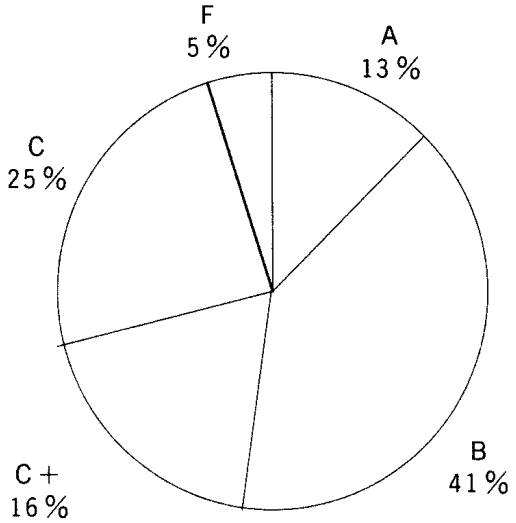
表１

	全体	教職	信徒	不明
A	33	18	10	5
B	105	47	34	24
C+	41	11	16	14
C	63	12	25	26
C−	1	0	0	1
F	13	2	7	4

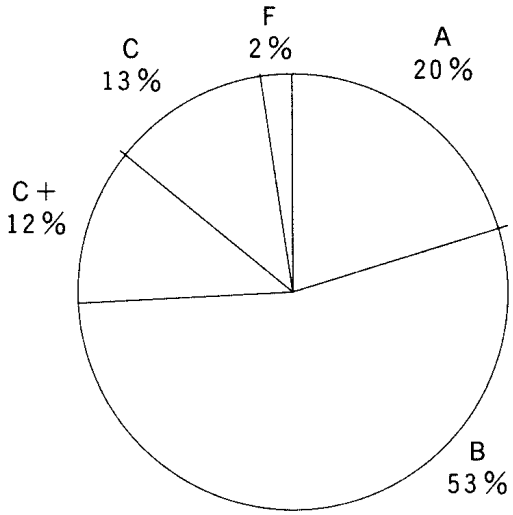
これを全体と教職について，さらに円グラフで表すと次のようになる（表２）。

表 2

internet は宣教に役立つか（全体）



internet は宣教に役立つか（教職）



第2の設問，インターネットの具体的な利用方法については，次のような結果となった。同一人複数回答ゆえ，パーセントは出さず回答数のみを多い順に記す。また，利用するインターネットのサービスが明確な場合にはそれを（ ）に記すが，ホームページはHPと略記する。

1．教職・信徒間の交流（HP，電子メール）75

2．新来者の獲得，人間をとる網として（HP）57

3．対内的情報提供，ニュースレターの補遺として（HP）56

4．遠方在住者との交流（HP，電子メール）49

5．対外的宣伝（HP）49

6．情報，資料の収集（HP，メーリングリスト，ニュースグループ）31

7．学生との接点，伝道（HP，電子メール）22

8．説教を読む（HP）15

9．説教のネタ探し 12

10．聖書研究（online Bible）11

11．祈りの要求（HP，電子メール） 7

12．その他17

証の場4，チャット[iv] 3，黙想3，求人2，同性愛キリスト者の交流2，

自殺・自己破壊の阻止1，旅行予約1，物品の購入1

第3の設問，サイバースペースの神学的可能性については，その問いの抽象性ゆえに，回答は様々であったが，内容から大きく4つに分類することができた。それぞれの具体的な内容と回答者数を次に列挙する。

1．インターネットの提供するサービスをあげたもの

・神学的議論の場を提供 40

・神学的情報，資料の収集 8

・チャット 4

・電子出版 3

・教育（ネット上で提供される神学コースなど） 3

2．インターネットを歴史的思想的に位置付けようとしたもの

・グーテンベルクの印刷術に比肩 6

・核エネルギーに比肩 1

・next frontierとして 1

・宣教史上新時代の幕開け 1

3．サイバースペース上の共同体の可能性を示唆したもの

・伝道のtool（キリストの世界宣教令[v]の実現） 6

・牧会的用法（online counseling, cyber－confessional, 病人との接点） 2

・virtual congregation, online worship 2

4．その他インターネットの利点や問題点を指摘したもの

＜利点＞

・経済的 10

・視野の拡大 5

・速さ 3

・心理的圧迫感のない匿名性（impersonal） 1

＜問題点＞

・アカウントを持ちコンピュータを操作できる人しか利用できない 11

・匿名性（impersonal）な性格が共同体に及ぼす悪影響を危惧 11
・利用者が第一世界の英語圏に偏向している 1

第2章　インターネットの宗教的利用の現状

前章の調査結果を踏まえて，アメリカのキリスト教会におけるインターネットの宗教的利用の現状について考察してみる。

先ずインターネットが役立つかどうかに対しては，全体で54%が「非常に役立つ」または「役立つ」と答えている。教職に限ればその数は73%にも達する。それに対して「役立たない」と回答した者は，全体で5%，教職では2%に過ぎなかった。つまりインターネットを導入し，実際に利用した教会では，過半数を越える教会が何らかの成果を実感しているということである。

次に具体的な利用方法だが，第1位はホームページや電子メールを使った教職信徒間の交流で75名。この様な人と人とのコミュニケーションツールとしては，他に遠方在住者との交流（49名），学生との接点（22名）等があり，さらには少数ではあるが「同性愛キリスト者の交流」（2名），「チャット」（3名）等もあり，具体例の大半を占めている。この様な状況は，インターネットの普及の過程を少しく調べて見ると大変興味深いものがある。

インターネットの発端は，よく知られているように米国防総省の高等研究計画庁（ARPA＝Advanced Research Projects Agency）によるプロジェクトであった。ここでパケット交換[vi]という通信技術が開発され，それを用いたネットワークシステム（ARPAネット）がインターネットの前身である。1969年開始当初から今にいたるまで用いられているアプリケーションは，遠隔ログイン，ファイル転送，電子メール，メーリングリストの4つである。遠隔ログインとは，遠く離れた場所にあるコンピュータにネットワークを通じてアクセスするアプリケーションで，ファイル転送は同じく遠く離れた2台のコンピュータ間で，ファイルをやり取りするアプリケーションである。この二つが最もコンピュータらしいアプリケーションであり，多くの人がインターネットにおいてもこれが最もユーザーを獲得するであろうと考えていた。

ところが実際にユーザを獲得し，頻繁に用いられたのは，電子メールとメーリングリストほうだったという[vii]。遠隔ログインやファイル転送が，コンピュータ相手のアプリケーションであるのに対し，電子メールやメーリングリストは，コンピュータの向こうにいる人間が相手である。インターネットは，実際につながってみるとコンピュータ同士をつなぐものと言うより人と人とをつなぐものとして用いられ始めたのである。

以上のようなインターネットスタート時の状況が，そのまま現在のキリスト教会における利用状況にもそのまま反映していると言える。

次に多い利用法が，情報の提供や収集である。アンケート結果では「新来者獲得」という項目（57名）でまとめたが，実質的には教会の対外的宣伝（49名）と同質の用法である。インターネットを教会の広告塔として利用するのである。またすでに教会員となっている者に対する情報提供も56名と比較的多数である。情報収集の方では，いわゆる一般的な情報資料の収集に用いると回答してきた者が31名，特に説教を読み直す目的で，ホームページの説教データベースにアクセスすると答えたもの15名。逆に教職で説教を作成するための材料集めに使うとした者が12名あった。

以上より現在の教会におけるインターネットの利用は，人と人とのコミュニケーションツールとしてと，情報の提供及び収集という二つに集約できることが明らかである。しかも，ここで注意しておくべきことは，この利用がすべてリアル空間に実在する教会共同体の運営をあくまでサポートするものだということである。インターネットをコミュニケーションツールとして用いるといっても，いわゆるそこでのコミュニケーションは，実際の教会共同体におけるコミュニケーションを，教会という地上の組織でのつながりを前提とした上での交流である。対外的な情報提供でも，ホームページを見た人が，教会に実際に来るようになることが最終的な目標である。説教のデータベースを閲覧するのも礼拝堂で実際に行われた説教を聞き逃したか，あるいはもう一度聞いて確認したいためであり，教職であれば，自分が実際の教会の説教で語る材料を収集するのが目的である。この限りではインターネットは何も特別なものではない。すでに紙のニュースレターが，地方紙の広告欄

が，あるいは電話やファクシミリがしていることを，インターネットでもやってみようというだけのことである。教会が真に伝えたいメッセージ（福音）は，あくまでも現実の教会の礼拝において聞かせる。そこへ導く手段の一つとしてインターネットが加わったまでである。アンケートの回答者の1人エミリー・クラーク（聖公会の信徒で自分の教会のホームページの制作者）の次の言葉がこの用法を象徴している。「インターネットは役に立ちます。しかし役立つ（useful）という言葉はインターネットを表現するベストな言葉ではありません。もっと的確表現をするなら，それは助けになる（helpful）ということです」[viii]。インターネットは，あくまで地上の教会共同体の活動をhelpするものなのである。

しかし，インターネットの用法は，少なくとも可能性としてはこれにとどまるものではない。現状は試行の段階ではあるが，単にリアル空間に実在する教会をサポートするのではなく，インターネットの仮想空間上に共同体を作る試みが，少数の熱心な利用者によってなされているのである。福音に導く手段としてではなく，インターネット上で福音を聞かせてしまおうという試みである。前章のアンケート調査の第3の設問の回答結果に即して，次章でこの可能性について考察したい。

第3章　インターネットの神学的可能性

ここではアンケート調査の第3の設問，サイバースペースの神学的可能性を問う問いに対して，これを歴史的思想的に革命的なものと位置付ける回答と，サイバースペース上の共同体の可能性を示唆する回答をしてきたものについて考察するのだが，すでに前章末で述べたように，これらは少数派であり，むしろこのような可能性を否定する回答の方が多い。そこで本題にはいるに当たって，先ずこれら否定的な意見に耳を傾けてみよう。それは例えば次のような意見である。「（インターネット）は，コミュニケーションや人の結びつきを作るにはよい道具である。しかし，教会の宣教を担うには至っていない。宣教は顔と顔を合わせてのコンタクトが必要だからである」（James and Karen Jones）。「私自身はインターネット上の宗教には問題を感じてい

る。神を礼拝するときには，他者と物理的に近くある（physically close to others）ことが必要だからである」（David Morgan）。「究極的に教会は人々が顔と顔を合わせて接触することを必要としている。なぜなら神が私たちに個人的に（in person）臨むということが，イエスの福音の中心だからである」（Rev. Paul E. Bartlett）。「サイバースペースの神学的可能性については私は何も知らない。その非人格的な性格が潜在的に共同体を破壊し孤立させるのではないかとおそれる」（Jim Liggett）。「ウエッブは万能ではないし，人生を向上させもしないだろう。個人的コンタクトは欠かせない」（PLU Campus Ministry Web Team）。「私が注意したいことは，クリスチャンライフというものは，共同体において営まれるのであって，孤立においてではないということである。ヘブライ人への手紙の著者が『集会を怠ったりせず』と語っているが[ix]，サイバースペースは，それ自体非常に孤立し隔絶したものになりがちである。しかし教会は人格と人格との制度（person to person institution）である」（Mark Smith）。「人々の心を本当に捉えるには，インターネットはあまりに非人格的すぎるように思う。真に成功した宣教は，出かけていって，人と個人的に接触することによってだった。ビジネスの世界でさえ，消費者と個人的な接触を持った企業が最も成功すると考えられている」（Kirk Olinger）。「私はインターネットを福音宣教の道具とは見なせない。福音宣教は顔と顔を合わせての証言によって最も良くなされると信じている」（Jesse Houck）。

以上，表現は様々だが，共通するのはインターネット上のコミュニケーションが非人格的（impersonal）なものであり，福音宣教には向いていないということである。この問題を更に突き進めていくとサイバースペース上の教会の可否，virtual religionの可能性の問題になるであろう。この問題について梅津礼司は，宗教のデジタル化，電子言語化，256色化，ドット化と呼び，さらに「オペレーションシステムの中でやりとりしている作業そのものに，宗教が還元されていく過程をイメージする」という。それは「読む宗教」，「見る宗教」，間接的局部的には「感じる宗教」であり，宗教の唯脳化につながるのではないか。そのような情報化された宗教が果たして宗教の名に値するも

のなのかどうか，あるいはこれらは宗教の再呪術化や再神秘化を促進し，宗教の私事化や社会と隔絶する閉塞的な集団を増殖する結果になるのではないか十分議論をする必要があるという[x]。

この問題の考察にあたり先ず，以上のような批判にも関わらずインターネットに代表されるコンピュータネットワークが，従来のメディアでは問題とならない神学的可能性を論じる余地がある理由を考えてみたい。すなわち，郵便の神学的可能性とか，電話やファクシミリの神学的可能性とかは問うに値しないのに，なぜインターネットやサイバースペースのそれは考察の対象になるのかという問題である。

それは一言でいうならば，インターネットに代表されるコンピュータネットワークが，仮想的とはいえ一つの空間を創出するからである。これがサイバースペースといわれるゆえんである。空間には共同体が現出する可能性があり，宗教的共同体の可能性を論じる余地が生まれるのである。

ここでサイバースペースという言葉が成立する過程を一瞥しておきたい。1948年，アメリカの科学者ノーバート・ウィーナーが，コンピュータを使う制御システムをサイバネティックスと名付け，以来ロボットやコンピュータの名称にサイバーという接頭語がつけられるようになった。サイバースペースという言葉自体は，ウィリアム・ギブスンの造語で，1984年に出版された彼のSF小説『ニューロマンサー』の中で使われたのが始まりだという[xi]。以来様々な定義がなされてきた。「電気を使って中枢神経組織を世界中に拡張し，あらゆる人間の経験を瞬時に相関させるもの」（マーシャル・マクルーハン），「21世紀に残された唯一の不動産で，電子のフロンティアに構築された，デジタル情報通信網の民が放浪する仮想世界」（ティモシー・リアリ）等々[xii]。永田守男は，サイバースペース出現までのメディアの発展を次のように要約している。「その昔，人間が直接会う形でのコミュニケーションしかない時代に，鉄道などの技術で遠く離れた人とのコミュニケーションが可能になった。飛行機やジェット機によって，その範囲が急速に拡大した。…電信によって，伝達できる情報の形態における制約は強いものの，遠く離れた人とのリアルタイムでのコミュニケーションが可能になった。さらに電話ができ，声での直

接のコミュニケーションができるようになった。人間どうしのコミュニケーションにおける空間の制約が取り除かれたのである。ファクシミリの普及は，文書，静止画などをリアルタイムに移動させ，また，電話と違い，必ずしも相手がその場にいなくてもよいコミュニケーションを可能にした。これで，リアルタイムに近いにもかかわらず，時間の制約も取り除かれた。コンピュータネットワークに基づく分散ネットワーク情報社会では，さらに，大量の文書や動画像を含めた大量の情報の移動が可能となる。…つまり，人間のコミュニケーションにおける時間と空間の制約がなくなり，交換する情報の量が増えて深いコミュニケーションが可能になり，手元に情報処理マシンまでがあるという状況になった」[xiii]。このような文字や動画さらには音声までも含めた大量の情報を自由に交換できる空間として生まれたのが，サイバースペースである。

さらに宗教的空間の条件として重要なこととして，この空間が，少なくとも可能性としては無限に開かれた開放的なものでありながら，同時にコンピュータという電子機器が生み出すものとして日常生活の現実空間からは隔離された空間でもあるということである。ヨハン・ホイジンガは，その古典的な書『ホモ・ルーデンス』において遊技と宗教的祭祀の内面的連関を考察して，両者ともに「日常生活から空間的に分離されている」点を指摘している。「一つの閉じられた空間が，現実あるいは観念の中で，日常的な環境から切断され，境界を設けられる。遊戯はこの空間内部で行われる。そこで適用されるのは遊戯規則である。一方，いかなる神聖な儀事の場合にも，神に奉献された場を標示することが，儀式の最初の，第一の特徴だった」[xiv]。コンピュータネットワーク上で，遊戯が成立することは，今日小学生でも知っている事実である。であるならば，宗教が成立する可能性も少なくとも考察の余地がありそうである。

「時間」「空間」の隔たりや「情報の量」における制約を越えて，しかも日常性からは分離された空間がサイバースペースということであるが，これをもう少し実際のインターネットの持つ機能から言い換えると，次の四点に集約されると思う。第一に，マルチなメディアであるということ。すなわち文

字や画像（動画も含む），さらには音声を統合的に伝達可能であること。第2に，双方向のメディアであること，しかも単に双方向性ということであれば，郵便や電話，ファクシミリもそうであるわけだが，これらが1対1の双方向性であるのに対し多対多の双方向性であること[xv]。第3にボーダレス（空間的制約がない）であること。そして最後にオン・デマンド（ユーザーの個々の要求に即応した情報が利用可能）[xvi]ということである。したがって，サイバースペースの神学的可能性を考察するにさいしても，これを神学的，あるいは宗教的に利用しようとするものが，これら四つの性質をどれくらい自覚しているかが大きな問題となる。事実，サイバースペースの神学的可能性を問う設問に，肯定的な回答を寄せてきた人は皆インターネットの持つこれらの性質に自覚的な人である。例えば聖公会の教職Louie Crewは，現実の教会からは排除されがちなレズビアンやホモセクシュアルのキリスト者が，インターネット上で交流し合っている事実を紹介して次のように言う。「そこは安らぎの場です。この空間では仏教徒も無神論者も自由に交流することができる世界中の人々にとって安全な場所です。わたしは，この空間で自殺がくい止められ，またその他の自己破壊的な行為から救われた例をいくつか知っています。これらはすべてこの電子空間において愛の神が人々に出会ったゆえなのです」。またサイバースペースを介した祈りについて「おそらく私たちの最も革新的な道具は，私がPrayers of the Internettersと呼んでいるページでしょう。私が望んでいるのは，人々，特に教会から離れてしまった人や恥ずかしくて教会で祈ることに困惑を覚えている人がこのページに来てくれることです。…インターネットは神が私たちに与えられた最善の賜物であること，そして，人々はネット上で聖霊による生活を思い出すであろうことを私は信じています」(Mary W. Matthews)。「将来は，on－line worship servicesといったものが可能になると思います。そこでは地理的な距離とは無関係な参加者により生き生きとした礼拝がなされるでしょう」(John B. Rose)。このような人にとっては，サイバースペースの出現は教会史上新時代の幕開けと理解される。「サイバースペースによって，教会と神学的な理解にとって，素晴らしいことが開始されたと私は考えています」(Shel White)。

これに対してサイバースペースの神学的可能性に否定的な人々は，先に述べたこのメディア固有の性質を十分自覚せず，インターネットをいわゆる従来の新聞雑誌等の文書メディアや，郵便や電話，ファクシミリの延長としか捉えていない。したがってインターネットの普及も教会を宣伝する方法が一つ増えたくらいの意識しか持っていないと思われるのである。換言すれば，インターネットの空間性に無自覚だということである。そういうところからは，これを現実空間における教会共同体運営をサポートする道具の一つとして用いるという発想を越えることは難しく，ましてやvirtual congregationとか，virtual religionといった発想は出てこないであろう。例えばサイバースペースの神学的可能性についての設問に対して次のような回答があげられる。「サイバースペース自体が何らかの神学的可能性を持っているとは思わない。神学的議論のための可能性は数多くあると思うが」(Alex.F.Burr)。「サイバースペースに新しい技術という以上の神学的に特別な意味があるとは思えない」(John R.Covertf)。「サイバースペース利用の神学的意義については，新聞やそれに類するメディアと同じ用法であると言いたい」(Emesto Hermandez)。「(サイバースペースの神学的可能性を問う) 問いの意味が分からない。サイバースペースには他のキリスト者とコミュニケーションをとる以上の意味はない」(Scott Benson)。

このたびの調査において，質問紙を電子メールで送付するアンケート調査と並行して，送付先648教会がインターネット上に公開しているホームページの閲覧を行った。すべてをプリントアウトし，その内容の検討を行ったが，その大部分が，いわゆる教会案内のパンフレットをそのままウェッブ上に載せたようなものであった。教会年鑑の内容，すなわち所在地や電話番号をただ無造作に貼り付けているだけというものも少なくなかった。しかし，少数ではあるが，上に述べたようなサイバースペース固有の特徴を最大限に生かし，virtual congregationの可能性を垣間見させているようなホームページも存在した。章を改めて，それらを紹介しながら，サイバースペースの神学的可能性を，さらに具体的に考察してみたい。

結び Virtual Congregation——地縁共同体を越えて

前章で考察したインターネット固有の特性を活用しているホームページとして次の四つを紹介したい。

1．Christ Church Parishの「祈りの部屋」[xvii]

いわゆる祈りの要求を書き込めるようにしている教会のホームページは珍しくない。しかし，多くが牧師に直接電子メールで伝えるという形式をとっているのに対し，このChrist Church Parishは，完全に公開の形をとっている。この調査をした段階で千を越える祈りが登録されているが，そのどれもがきわめてまじめで深刻なのに驚かされる。一端を紹介する。「私の義理の姉ジェニアは肺癌です。彼女は33歳で，生まれたばかりの赤ん坊と5歳の息子があります。どうぞ彼女のいやしのために，また彼女と同様な状況にある母親たちのために，慰めと力が与えられるよう祈って下さい」(Shirley)。「私の母マルガレーテは，アルツハイマーで苦しんでいます。さらに彼女は転倒し右足の大腿骨を折ってしまいました。私の仕事のためにも祈って下さい。私たちは政府の削減政策で窮地に立たされています。小さな会社ですが，六家族が生計を立てています。私は誰も解雇したくないのです」(John Croix)。「私の二人の息子と私自身のために祈って下さい。私は妻から離婚を迫られています。彼女は他に恋人を作り，その愛を継続することを選びました。私は彼女が家庭に戻るように手を尽くしましたが無駄でした。かつての愛妻は，今や私を激しく憎悪しています。私が子供を引き取ろうとしているからです。二週間前に妻は家を出て愛人と同棲をはじめました。彼女は自分の自由意志で去っていったのです。五歳と三歳の二人の息子のために祈って下さい」(Jerry Austin)。その外に恋人のエイズ感染に苦しむ人等々，この祈りの部屋にはあらゆる人生の縮図がある。しかも，個々の祈りの提供者は，ほぼ全員が電子メールのアドレスを併記しており，クリック一つでその人にメールを送ることができるようになっている。一面識もないアメリカの地方教会のメンバーの苦しみ，悲しみに共感した日本人が，その場で励ましの言葉を送ることができるのである。ボーダレスな多対多の双方向コミュニケーションが，ここ

に実現している。サイバースペース上に実現された仮想の信仰共同体の一端をここに見る思いがする。

2．Grace Cathedral's Web Site[xviii]

このページの圧巻は，説教のデータベースである。毎週の説教の原稿もしくは要約をデータベースとして載せているホームページは珍しくないし，そのようなものであれば紙のニュースレターや教会報とかわりがない。しかし，このGrace Cathedralでは，毎週の説教をすべて音声データベースとして公開しているのである。しかも音声ファイルをダウンロードしつつ同時に再生可能な最新の再生ソフトRealAudioをサポートしているので，ほとんど待たされることがない。リストから聞きたい説教をクリックすると数秒後には再生が始まる。音質も申し分なく，少しエコーのかかった説教を目を閉じて聞いているとGrace Cathedralの会衆席にいるかのような思いにさせられる。インターネットのマルチメディア性の活用である。

3．The First Church of Cyberspace[xix]

先の二つが，アメリカの地方教会のサービスであるのに対し，これは長老派の牧師の資格を持つ教職が明確な意識を持って運営しているインターネット上の教会，virtual churchの試みである。ここで特に興味深いのは聖書のHypertext Versionの試みである。

例えば詩編23編は次のように記されている。

The *Lord* is my *shepherd*, I shall not want.
God makes me lie down in green pastures and
Leads me beside *still waters*.
God restores my soul,
Guiding me on the *right path* for the sake of God's holy name.
Even though I walk through the valley of the shadow of death,
I fear no *evil*; （以下省略）

一見何の変哲もないテキストだが，下線部分をクリックするとその語に関連するウェッブサイトに飛ぶことができる。たとえばshepherdをクリックすると「羊に関するホームページ」に移り，そこには「聖書と羊」という項目

があり，そこを開くと聖書の中の羊が登場するすべてのテキストの個所が分かるようになっている。同様にevilという語は，「Faces of sorrow」というホームページにリンクしており，そこでは最近のユーゴスラビアの状況，とくに戦火に苦しむ民衆の様子，民族浄化，レイプの悲劇が写真を交えて克明に報告されている。ボーダレスで，マルチなメディアというインターネットの性質を活用したサイバースペースならではの聖書テキストとして評価できる。

4．The Temple of EPOCH[xx]

これもvirtual churchの試みで，EPOCHとはEcclesia Pro－，Ortho－，Catholico－，Hebraicaの略である。すなわちプロテスタント，カトリック，ギリシャ正教，そしてユダヤ教というおよそ聖書的宗教を奉じる人々すべてが礼拝できるために設けられたサイバースペース上の神殿である。このサイトの冒頭には「今は世界中の神の民にとって歴史的瞬間である。今や教会は真に一つの聖なる公同の使徒的教会となる。新旧の礼拝が再び一つになるのである」と記されている。順を追ってページを開いていくと，聖書を読み，詩編による賛美ができ，さらに説教を読み，最後には祝福の祈りを受け，礼拝のプログラムを一通り経験できるように作られている。ただし，すべて文字テキストによるものでありインターネットの特性を十分に生かしたものとは言い難い。ただ，このサイトの特徴は，席上献金のページが設けられていることである。そこを開くと，クレジットカードのナンバー等を入力するフォーマットが現れ，オンラインで献金できる仕組みになっている。サイバースペースの空間性を徹底すれば，情報のみならず金銭の交換もなされるというのは当然だが，筆者の個人的な感想としては，現在のインターネットのセキュリティーを考えると，とてもここに自分のクレジットカードナンバーを書き込む気持ちにはなれなかった。「いったいどのくらいのメンバーが今おり，その国籍は何か」という筆者からの問い合わせに対し，この神殿の主催者Fr. Melchizedekは，プライバシーに関わることなので構成員の情報を今公開するわけにはいかないが，同神殿への協力の申し出がアメリカの他ヨーロッパからも来ているといい，次のようなメールを送ってきた。「この神殿はまだ始

まったばかりで，地球的な規模での教会の統合というその使命を果たすためには，まだ多くの基礎作業を必要としています。…日本にはまだ支部はありませんが，しかし，私たちは神が，まもなくあなたの国にもそれを確立して下さると信じています。キリストは言いました『収穫は多いが，働き人が少ない』と。収穫の主が，世界中の収穫のために労働者を送ってくれるよう私たちは祈っています」。主催者も認めているように，まだまだ試行の段階であるが，このようなインターネットのボーダレス性を活用したグローバルチャーチの企てとして評価できると思う。

以上，四つの事例を通して，インターネットを単に地上の教会の宣教の補助手段として用いるのではない，それを超える可能性を点描してきたわけだが，最後にこのような試みの歴史的意義を考察したい。

サイバースペースの神学的可能性を問う第三の設問に対し，これを歴史的に位置づける回答で最も多かったのはグーテンベルクの印刷術に比較できるとするものであった（6名）。例えば次のような意見である。「サイバースペースに関して私はある理論を持っている。私の宗教史（特にユダヤ・キリスト教史）研究によれば，人類の情報処理技術（すなわち情報の保管や修正や伝播の技術）の歴史のどの舞台においても，宗教における重要な改革や革命が伴っていた。例えば，人間の記憶技術が，社会的支援体制へと制度化された時，指導的な物語りの語り手たち，預言者や教師，祭司たち（名称は地域や場所によって様々）が立ち現れた。そうして倫理的な一神教（すなわちユダヤ・キリスト教信仰の正に起源）が始まった。それから記述行為が文書の保存を可能とし，倫理的一神教を支援する考えや物語が聖典となっていったのである。さらに印刷術が，聖典の広範囲な伝播を可能とし，キリスト教内に宗教改革が起こった。むろんこの間その他の数多くの出来事はあるが，ハイライトは以上の諸点である。そして現在サイバースペース，インターネットが，情報の保管，修正，伝播における重要な新技術として登場しており，それはユダヤ・キリスト教信仰における宗教改革を再び期待できるもののように私には思われるのである」（Gordon Morrison）。他の5名は，これほど詳細には述べていないが，基調は同一である。このようなサイバースペースの

歴史的位置づけは，筆記や印刷，あるいはテレビ，コンピュータといったその時代ごとの新しい技術の普及が，人間の心性や社会の様態を変化させるというメディア論としてマクルーハンやオングによって論じられてきた古典的な議論の宗教史への応用とも言い得るであろう。マクルーハンによれば，グーテンベルクが実用化した活版印刷術は，「一つの技術であったのみならず，それ自体で，綿花，材木，電波のように天然資源もしくは基本材であった。そしてすべての基本材同様，単なる私的な意味での感覚比率だけではなく，共同体的相互依存の諸型をも形成した」のである[xxi]。すなわち，活版印刷は，世界を断片の組み合わせとして表現し，その断片の均質かつ直線的な組み合わせによって，視覚中心の近代的ロゴスの文化，個人主義，ナショナリズムなどを成立させた。同時に，人々の非視覚的経験は抑圧され，全体的な生から疎外されることになってしまったという[xxii]。さらにマクルーハンによれば，このような活字文化の支配状況は，電子テクノロジーの台頭により揺らぎ始めており，この新技術が，これまで抑圧されていた諸感覚の統合を助長し，新たな触覚的文化とでもいうべき時代を築きつつあるという[xxiii]。このような技術決定論的立場に対しては，社会的生成論の立場[xxiv]からグーテンベルクの革命性に疑問を投げかけるロジェ・シャルチエなどの反論もあり，さらに批判的な検討を要するであろう。ここではサイバースペースの宗教史的意義を論じるに際して，メディア論のより広い枠組みでの議論が不可欠である点を指摘することで止め，今後の課題としたい。

インターネットの歴史的意義については，以上のような留保をするとしても，今回のささやかな調査において点描されたその神学的可能性を示す事例の一つ一つを結び合わせるときに見えてくるものは何であろうか。それは一言でいうならばvirtualな空間において実現される地縁を越えた共同性である。

ユダヤ教を母胎として成立したキリスト教は，ユダヤ教が持っていた血縁共同体という性格をほぼ完全に止揚したと言えるであろう。イエスは，血縁による親兄弟に対し「神の御心を行う人こそ，私の兄弟，姉妹，また母なのだ」と言われた（マルコ3：35）。パウロは，民族的な血のつながりではなく「信仰によって生きる人々こそ，アブラハムの子であるとわきまえなさい」と教

えた（ガラテヤ３：７）。血縁に対し，信仰による共同性を主張したことによって，キリスト教はユダヤ教から独立した宗教となったと言ってもよいであろう。

それでは地縁ということについてはどうであろうか。新約聖書では，各個教会はすべて地名を伴って呼ばれている。コリントにある教会，エフェソにある教会，フィリピにある教会…。現在も多くの教会が，その所在地を教会名に採用している。「地域に根を張る」ということは教会形成の重要な課題とされてきたといってよいであろう。教会は，そのあり方として地域（地縁）共同体を目指してきたのである。それは現実空間に建てられた教会としては当然のことである。このような地縁共同体の共同性を基準にして，あるいは目標にして，サイバースペース上の共同性を評価するならば，そこには否定的な評価しか生じないであろう。すでに見てきたインターネットの神学的可能性に対する否定的な評価の原因は，おそらくここにある。しかし，サイバースペース上の共同性を，従来の地縁共同体としての教会という発想から自由になって評価するときに新しい可能性が見えてくるのではないか。たとえば，virtual religionによって，現実の共同体が力を失っていくのではないかという危惧に対して笠井は，「（パソコン通信等の）メディアの特徴は，血縁や地縁といった制約を越えて第1次的人間関係を確立する可能性を持っている」と言い[xxv]，また足羽與志子は，「今は空間を越えて地縁社会に密接しない新しい共同体ができつつあります。だだそれは，地域社会のつながりを深めることに通じることにもなると思います。『グローバルに考え，地域で活動する』というフレーズが少しずつ聞かれるようになってきたのも現代ならではと思います。…こうした二重の共同体に人々が生きるようにする，その想像力と活動を持たせるようにする，それが情報社会の中の，またこれからの宗教のあり方として注目されて良いのではないかと思います」[xxvi]と言う。このような互いに他を活性化し合うような二重の共同性が，現実空間における宗教共同体と，サイバースペース上の共同体，virtual congregationとのあり方であり，その模索が今始まっているということではないだろうか。

i 岡部一明『インターネット市民革命―情報化社会・アメリカ編』（御茶ノ水書房）

ii 648教会の内訳は次の通り。

- Lutheran Church

  ELCA Home Page (http ://elca.org/homepage.html) にホームページが登録されている教会　220

- Presbyterian Church

  Presbyterian Church U.S.A.(http ://www.pcusa.org/pcusa.html) にホームページが登録されている教会，地方長老会（synod），中会（presbytery）154

- Episcopal Church

  Anglican Online－USA (http ://www.anglican.org :80/online/usa/index.html) にホームページが登録されている教会区（parish),教区（diocese）274

iii 設問の原文は以下の通り。

1. Is internet useful for you, especially for the mission of your church？
2. If yes, please tell me some examples of the usage concretely？
3. What kind of theological possibilities are there in cyberspace？

iv ネット上でなされるリアルタイムな会話，おしゃべりのこと

v マタイ福音書28 :19参照

vi インターネットの根幹技術。データを細切れにし，小包（パケット）のように一つ一つに宛名をつけて送信する。一つの回線の上を色々な人の小包が走っていくことが可能であり，例えば10万台のコンピュータが同時に通信するとしても，たいして回線数を確保しなくてもよい。古瀬幸広『インターネットが変える世界』（岩波新書）p.18参照

vii 古瀬同上書p.22

viii "it is useful, though useful is not perhaps the best word to describe it. A better way to portray it is that it helpful."

(Emily Clarke)

ix ヘブライ人への手紙10 :25

x 池上良正・中牧弘允編『情報時代は宗教を変えるか』(弘文堂　平成8年) p.49

xi ジョアナ・ビュイック『サイバースペース』(心交社 1996年) p. 4

xii 同上書p 6 − 7.

xiii 永田守男『ソフトウェアの挑戦—仮想空間からの問いかけ』(講談社選書メチエ1995年) p.157−158.

xiv ヨハン・ホイジンガ，高橋英夫訳『ホモ・ルーデンス』(中央公論社　昭和59年) p.43.

xv 多対多の双方向性という表現は，これを利用した経験のないものにはなかなか理解が困難であるかもしれない。古瀬幸広は，阪神大震災におけるコンピュータネットワークが果たした役割を論じる文脈で，この双方向性について次のように書いている。「電話と違い，コンピュータネットワークは参加者全員で情報を共有できる。そしてその結果として，見知らぬ人と人とを結びつけるのだ。この特徴は，他のメディアにはない。新聞，ラジオ，テレビはいずれも一対多のコミュニケーションであり，電話，電報，ファックスは一対一のコミュニケーションである。コンピュータネットワークは，アプリケーションによって一対一，一対多のコミュニケーションを実現するだけでなく，多対多のコミュニケーションをも可能にする。…そこには，専門家が情報発信を担い，残りは読者に徹する，というような切り分けはない。一人一人が読者であると同時に，必要に応じて発信者にもなる」。古瀬幸広・廣瀬克哉『インターネットが変える世界』(岩波新書1996年) p.51−52.

xvi 実際にインターネットを利用してみると，要求に応じた情報を探し出すのは，それほど容易ではない。すぐれた検索サービスが多数あるが，求めた情報が必ずしもそのまま見付からない場合も多い。しかし，それは従来の例えば図書館等で情報を探す場合にもままあることである。ここでいうオン・デマンドとは，そのような意味ではなく，ある目的の情報

をデータベースとして獲得してからのことである。デジタル化されたデータベースは，利用者の求めに応じて自由に加工することができるからである。

xvii Christ Church Parish's Prayer List http://www.seanet.com/Users/jbrian/prayer.html

xviii http://www.gracecom.org/

xix http://execpc.com/~chender/index1.html

xx http://www.itai.com/epoch/epoch1.htm

xxi M.マクルーハン，森常治訳『グーテンベルクの銀河系―活字人間の形成』（みすず書房）p.251.

xxii 水越伸他『コンピュータ半世紀』（ジャストシステム1996年）p.56－57.

xxiii M.マクルーハン前掲書p.402以下参照。

xxiv 人間や社会の側が，新しいテクノロジーを加工し，デザインしていくという側面を強調する立場。ロジェ・シャルチエはその代表者で，彼によれば「書物（これはグーテンベルクが発明したのではない）の長い歴史の中に置き直して見れば筆写文化から印刷文化への移行は，その革命的な性格を失うことになる。反対に，印刷本がどれほど写本を継承しているのかが際だってくるのである」。水越伸他『コンピュータ半世紀』（ジャストシステム 1996年）p.60参照。

xxv 池上良正他編『情報時代は宗教を変えるか』（弘文堂）p.67.

xxvi 同上書p.135.